

フックト オン クラシックミュージック

松井 とし

クラシックの名曲が次々とつながって流れ出てくるこのレコードを耳にするたび、子どもたちとの躍動感に満ちた日々が思い出される。

思わず身体が動き出してしまうような軽快なメロディーに合わせて演奏すると、リズム楽器だけの演奏も、とても立体感のある楽しい音楽になった。「ここは大鼓だけで…」とか、「ここは、ずっとトライアングルがいい」等と、子どもたちが曲想と楽器のイメージを結び付け、自分たちでアレンジしていた。

入園当初から慣れ親しんだこのメロディーに、歩く、走る、跳ぶ等、日常的な身体の動きを振付け、年長の運動会で踊った。

音楽の大好きだったA男は、卒園記念のアルバムの表紙にいろいろな楽器をもったたく



カット・佐藤和代

さんの友だちと合奏している絵を描いた。デュフィの作品にも似たその絵には、みんな
で音楽を創り出す楽しさが満ちていた。

子どもたちの心に日々の生活を委ね、子どもと共に生活を作ることができるようになっ
た頃からだろうか。保育の日々がまるで生きていくかのように変化し、その中で予想を超
えたさまざまな出会いが生み出されることを実感できるようになった。

ひとつの活動が次の楽しみを生み出すきっかけとなり、しばらく潜行していた活動は形
を変えて、また新たな充実に蘇る。

たとえばお店やさんごっこをするという目的が先にあって、その準備のためにものを作
るということではなく、作る楽しみがあつてそのことに熱中する。

一心に取り組む過程で次々と生活が広がり、思いもかけなかったことが生み出される。
一人ひとりの日常的な充実感が新たな楽しみにつながり、広がっていく。こうして、活動
のスパンが従来よりずっと長くなり、生活が自然に流れるようになった。

クラシックの名曲が次々と流れ出てくるこのレコードは、「今日はどんなことに出会え
るだろうか……」とわくわくした、あの頃の心の高まりを象徴的に思い出させてくれる。

(元・幼稚園教諭)